

- 36 被験者に実験課題は、パソコンの画面に0・3秒と0・6秒間隔で映し出される四角の中の文字を見ていて、その中に数字が出てきた時にボタンを押すこと。実際には連続する文字の中に二つの数字が混じってくるのだが、瞑想を訓練していない人は最初の数字を検知できても次の数字を見逃してしまいがち。瞑想している人は、両方の数字を検知することが多かった。詳細はMental Training Affects Distribution of Limited Brain Resources. (Sagster et al. 2007) を参照のこと。
- 37 詳細は' Kilgworth, M.A. & Gilbert, G.T. A wandering mind is an unhappy mind. 2010 Science を参照のこと。このテーマに関するキリグワースによる講演がTEDシリーズで視聴できる。
- 38 Generosity for Uncertainty という表現は、仏教という無我の西洋風な言いかえのように聞こえた。
- 39 会場のフォーカシング指導者から、他者への調律とフォーカシングの代理的フェルトセンスとの共通点が指摘された。トニー先生は、フォーカシングの詳細な手法について確認しながらその共通性を認めておられた。
- 40 このエクササイズは、老師がFrank Ostaseskiから学んだもので、彼はFrances Vaughanから学んだこと。
- 41 Tell me, what is it I need to know about you that would help me understand why it's so important bring compassion into the world. 在宅ホスピス医の内藤先生の活動については、次のURLを参照のこと。 <http://www.naito-izumi.net/>
- 42 筆者はInsight Meditation Societyのファミリーキャンプでトーキング・ステイックという類似の手法を体験した。ネイティブアメリカンのトーキング・ステイックやトーキング・サークルの伝統については次のURLを参照のこと。 https://en.wikipedia.org/wiki/Talking_stick
- 43 フォーカシングの池見陽先生については、次のサイトを参照のこと。 <http://www.akira-ikemi.net/AkiraIkemi-Net/Index.html.html>

- 45 Daniel Kahneman, 経済学と認知科学を統合した心理学者、経済行動学者。二〇〇二年にノーベル経済学賞を受賞。2種類の思考については「ファースト&スロー...あなたの思考はどのように決まるか?」(早川書房、二〇一三)を参照のこと。YouTubeで彼の「経験と記憶の謎」という幸福に関する講演を視聴できる。
- 46 チベット仏教に伝わる瞑想法で、与えることと受け取ることを意味する。詳しくは、ゲシェー・ソナム・ギャルテン・ゴンタ著「チベット密教 心の修行」(法蔵館、二〇〇〇)を参照のこと。
- 47 京大附属病院のがんセンターでがん診断支援部長ならびに緩和ケアセンター長を務める恒藤暁先生については、附属病院のHPからアクセス可能。恒藤先生はWhole Person Careの導入に尽力されており、ここではマインドフルネスが大切に取扱われている。



いのちの歴史と未来の医療

稲葉 俊郎

東京大学医学部付属病院循環器内科助教

偏見を強めるためではなく自由になるため

ブッダの生き方はつまり「人はどこまで相手の思いになれるのか、やさしくなれるのか」の探求であったとも思います。

里中満智子「ブッダをめぐる人びと」より

自分は西洋医学の医療現場に携わっている。専門は循環器内科医であり、心臓を血管の中からカテーテルという道具を用いて治療することに二四時間三六五日休みなく従事

している。ただ、医療は多面的な世界であるため、その他にもさまざまなアプローチで医療に取り組んでいる。学生時代はすべての休みを登山に使っていた。自然や山への恩返しをしたいという思いから、夏には山岳医療にも取り組んでいる。山の中では下界での現代医学とは違い、物資に乏しい中で色々な工夫をしてベストを尽くす事が求められる。山という自然の中では原始的な医療の本質を考えさせられる。また、週に一回は在宅医療に携わり、患者さんのご自宅に往診することで心臓以外の総合診療にも従事している。そこでは老いや介護や看取りや死という現実的で泥臭い問題にも直面する。

日々こころやからだのことを広く深く追究していくプロ

セスの中で、西洋医学にとどまらず、あらゆる伝統医療や代替医療、民間医療も学び続けるようになった。なぜなら、現場で真面目に働けば働くほど西洋医学だけでは不十分であることを痛感しているからだ。学問は偏見を強めるためではなく偏見から自由になるために行うものだ。大学という学びの場でそういう学究的な姿勢が失われているように感じるのが残念でならない。医学部や西洋医学の現場では、西洋医学以外でのアプローチを学んだり応用したりする機会に恵まれない。例えば、自分が学んだ東京大学医学部では東洋医学や漢方の講座すらなく、それぞれの医師が必要と感じたときに働きながら独習しているのが現実である。

医学には西洋医学だけではなく、伝統医学（東洋医学・中医学、インドのアーユルヴェーダ、ギリシアを起源としたアラビア・イスラーム文化圏でのユナニ医学、チベット医学など）があり、こころやからだやたましいへのさまざまなアプローチをする補完代替医療（あらゆる手法がある）があり、民間の中で伝えられてきた民間医療がある。自分は困っているひとの助けになりたいと日々感じているため、自分が学びたいことは足を運んで色々な方に教えを請い、貪欲に学ばせてもらっている。自分は医療のプロとしての誇りを持っているからこそ、からだやこころのことで知ら

ないことは知らないと謙虚に認めて学びたい。さまざまなアプローチでこころやからだやたましいに接している方々から、あらゆる可能性にこころを開き、その智慧や技術を学びたい。科学は普遍的な知恵に至るものだが、ひとはそれぞれが個別的に全員違う。だからこそ、普遍性と個別性と、両方向性からのアプローチが必要になるのだと思う。

ひとのからだに対する一般的な知識を学習することは大事なことだが、医療で行うことは方程式に代入して同じ結果が出るような単純な機械作業ではないため、常にそれぞれのひとにに応じて個別の修正を図る必要がある。そのために、伝統や歴史や現場の中で受け継がれてきたさまざまなアプローチを組み合わせていくことが、今後は必要なのだと感じている。

「治す」と「治る」——生きる

真理を語ること。怒らないこと。

頼まれたら少しでも助けてあげること。

この三つを実践する人は、

神々の世界に行くだろう。(二三四)

アルボムツレ・スマナサーラ『原訳「法句経」一日一悟』

医師になりたての頃は、自分が「病」を治したい・よくしたい、ということに関心があった。とにかく知識と技術を深めていくことに関心があった。治す治療の技術テクニックの研鑽けんけんに努めていた。

ただ、実際の医療現場で患者さんと向き合っていると、少しずつ考えが変わっていった。医師としての自分が治す、というよりも、患者さんの力で「病」が治る・よくなっていく、というふうには、自分ではなく相手へと主体が変わっていったのだ。あくまでもそのひと自身の力で治っていくことをできる限りサポートしていくのが医療の役目だと思うようになった。そのことは、自然治癒力という生きているひとが生きている限り持っている、調和の力を信じていることでもある。

さらに臨床の現場を重ねていくと、病をよくする、病がよくなる、という領域を越えて、「生きる」という「いのち」そのもののプロセスへと焦点が当たるようになった。病気が治る、治らない、という次元にこだわらなくなった。病気がひとが生きて、老いて、死んでいく、というプロセスにい

かにして寄りそうことができるか、ということが本質なのだ実感するようになった。

ゴータマ・シッタールタが生涯かけて取り組まれたように、生老病死というプロセスには人間にとつて非常に重要なことが内在している。それぞれの人生には個別的な深い意味があり、そのことを自己発見していくプロセスこそ大事なことだ。人生の主役は、一回性の人生を生きているそのひと自身なのであって、それは誰かと比較したり代わったりできるものではない。

病は、よくなる場合もあれば、よくなる場合もある。あらゆる手を尽くして努力しても、この大自然から与えられた寿命や天命というものに、ほんの少しも触れることすらできないこともある。

私たち医療者は、病で困っているひとを助けるために最善の努力をし続ける。もちろん病を治すことは大切なことだが、現場で経験を積む中で、それだけでは不十分であることも強く感じるようになった。なぜなら、病の奥底にある病の深い意味や、病というプロセスの全体像からメッセージを受け取らない限り、病は別の形で再び現象化して

くることを嫌というほど何度も経験しているからだ。だからこそ、病を治す努力とともに、相手の人生にとって病がどのような意味を持つのかを医療者として理解しようとし、病の意味を自己発見しながら人生を生きていくというプロセスが、極めて重要なことになるのだ。それは、病を短期的な視点だけで見るのではなく、人生という長いスパンの中で長期的な視点で見るといふことだ。

長期的な視点というのは、一つの人生 (Life) という視点でもあるが、さらに視点を引いて、ひとのからだやこころに宿るいのち (Being) そのものが、果てしない過去から受け継がれ続けているという、個を超えた視点のことも含む。人間という存在には、一人の人生だけではないさまざまな時間が同時並行で流れているものらしい、ということを感じるようになった。

西洋医学と非西洋医学の特徴

作家あるいは人は誰でも、自分の身に起きることはすべて道具であると思わなければなりません。あらゆるものはすべて目的があつて与えられているのです。

だからこそ私はある詩の中で、昔の英雄たちの食物、すなわち屈辱、不運、不和について語ったのです。それらが与えられたのは、私たちに変質させるためであり、人生の悲惨な状況から永遠のもの、もしくはそうありたいと願っているものを作らせるためなのです。

ボルヘス「盲目について」「七つの夜」より

現代医療は西洋医学がメインだ。医療の歴史を見ると、自然科学の発生とともに機械論としての西洋医学も生まれている。歴史的な視点で見ると、西洋医学は比較的歴史の浅い考えであることが分かる。ドイツのウイルヒヨウ (一八二二—一九〇二年) は、一八五八年に「全ての細胞

は他の細胞に由来する」という細胞病理学を提唱したこと、で、それまでのアリストテレス、ヒポクラテス、ガレノスと長く支配的であった体液病理学とは、まったく異なる病の概念を提唱した。その後、一八九九年にバイエル社により世界初の人工合成医薬品としてアスピリン (アセチルサリチル酸) が発売され、一九〇〇年頃にはドイツのコツホ (一八四三—一九一〇年) (ルイ・パスツールとともに、近代細菌学の開祖とされる) により「細菌学」技術が確立した。このような自然科学の流れをベースにして、機械論としての西洋医学は大きく発展することになる。一八〇〇年代半ばから現れてきた西洋医学は、人体を細かいパーツに分けて考える還元主義の考えに立っている。西洋医学の発展は感染症や外傷などの急性期医療の治療において目覚ましい効果を挙げ、人類が受けた恩恵も大きい。ただ、西洋医学の発展の陰に、失われたものも多い。

では、メインストリームから外れてしまった伝統医療や現在では代替医療と呼ばれているものと西洋医学とは、果たしてどのような違いがあるのだろうか。

実際、西洋医学と非西洋医学では、からだや生命や自然に対する視点が大きく異なる。ただ、そこに善悪や優劣はない。私たちがどういう自然観で人間を捉えていくのか、

という未来における選択の問題である。ここに提起される選択肢そのものにはいいも悪いもなく、中立的なものだ。人類の営みの中で生まれてきたものには大なり小なりすべて意味があるからこそ、この地球上に存在している色々な方法論をどのように使っていくのか、という方法論が大切になってくるのだ。うまく使い分け、組み合わせていくという使い方にこそ、本質がある。すべては使い方次第でこちらにも転びうる。

西洋医学は、「病」を定義する。その定義は病理学的なもので、顕微鏡や人体解剖などの可視化する技術の発展とともにあった。「細胞や臓器にある変化が起きていたら(○病)という病名にする」として、病名を定義する。そして西洋医学のベースには、その病気を忌み嫌う悪いものだと捉え、その病を避けよう、なくそう、倒そうとする考えがある。この発想は、自分の体を(戦いの場)と捉えることでもある。このガンを倒そう、やっつけよう、戦おう、という発想で治療方針を組み立てていくことは、自分の体を(戦争のメタファー)として捉え、戦争のように相手と戦って勝利を勝ち取っていく考えである。西洋医学では病はあくまでも敵とみなされることになる。

	非西洋医学（伝統医療・代替医療・民間医療など）	西洋医学（19世紀～）
哲学	生氣論 (vitalism)	機械論 (Mechanism)
古代	プラトン	デモクリトス
	アリストテレス	
進化論	ウォーレス	ダーウィン
哲学	ベルクソン	デカルト
病理学	体液病理学説	細胞病理学説
	漢方鍼灸医学（精・気・神）	
	アーユルヴェーダ（ヴァータ、ピッタ、カパ）	
	ヒポクラテス（血液、粘液、黄胆汁、黒胆汁）	ウィルヒョウ
治療	自然療能（自然治癒）説	病原体説（コッホ、細菌学）
	自己治癒（治る）	他者が治す
	根本治療と対症治療の合一	有機合成医薬品（1870年代～）
	食養	
特徴	目的論 共時性	因果論
	動的	静的
	天地人合一	人のみ 自然と対立
	心身魂（靈）合一（body, mind, soul, spirit,）	心と身（body, mind） 心身二元論（デカルト）
	健康を定義	病を定義
	病や症状は自分（仲間、先生）	病や症状は敵
	からだは調和の場	からだは闘いの場
	見えるものと見えないもの	見えるもの
	この世とあの世	この世
	物質と波動	物質
	主観、直観重視（瞑想→心眼）	客観 理論重視

【表】非西洋医学と西洋医学の特徴
石原克己「伝統医学のこれから—人・心と生活の在り方 第1巻」より一部改変

立場を何よりも大切にしたい。

全体のイメージとしては、孔子『論語・子路』「君子は和すれども同ぜず。小人は同ずれども和せず」を合言葉にした。共鳴・協調すること（「和」と）、主体性を失い盲目的に同調すること（「同」とは違う。「和」は「こころ」で共鳴すること、「同」は「あたま」でコントロールすること。音楽でいえば、いろんな音とのハーモニー、シンフォニー、ポリフォニーを奏でるのが「和」であり、一つの単音に染めること（「同」とは違う。「未来医療研究会」という場を通して、人と人とが集うとき、どういう「場」が実りいいのか、そんな「場づくり」そのものも考えたいと思った。

この場ではさまざまなジャンルの人々に声をかけ、発表者は講演費も謝礼もなく、発表頂いた。まずはあらゆるジャンルの人たちがお互いを知り学び合うこと、それぞれが優秀意識から自由になり、調和して協力することがまず重要な土台作りになると思った。

* * *

改めて、西洋医療の世界にも、非西洋医療である伝統医

療・代替医療の世界にも、課題が山積していることもよく分かった。そして、今後いかにして現代医療制度の中にソフトランディングしていくべきなのか、色々な宿題を頂いたとも感じている。そうして社会の摩擦の中で学ばせて頂きながら、よりよいものをつくりあげていく必要があるのだらう。調和とは、自分の好みだけを集めた狭い世界で調和していくのではなく、あらゆる世界との調和を図っていくことが必要だからだ。今後はあらゆる角度からこの問題を検討しながら、未来の医療や未来を担うひとたちのために、微力ながらも貢献できればと感じている。

調和の場として

ものごとは心にもとづき、心を主とし、心によってつくり出される。

もしも清らかな心で話したり行なったりするならば、福業はその人につき従う。

——影がそのからだから離れないように。

中村元訳『ブッタの真理のことは感興のことは』
「真理のことは感興のことは（タンマバダ）」

飛躍するように感じるかもしれないが、一人一人が自分のからだを「戦いの場」と捉えて、自分のからだだと戦う、やっつける、倒す、殺す……というメタファーで捉え続ける限り、この世界から戦争や争いはなくならないのではないかと思う。

一人一人が自分のからだを「調和の場」と捉えて、「病」を不調和から調和へと動くプロセスであると考えることが、地球も宇宙も、我々の生きている場が、調和的な場に変容することにつながっていくだろうと思う。なぜなら、地球を一つの人体と捉えれば、七〇億以上の人間や、数え切れないほどの菌や虫や魚や鳥などの生き物が、からだの細胞のように調和的に共生している場として地球という星を捉えることができるからだ。

からだという場をどう捉えて日々過ごしていくかということが、社会や地球を含めたあらゆる場をどう捉えるかということと相似形であると思う。人間は比喩的に物事を捉える存在であるからこそ、生まれてから死ぬまで一瞬も離れず接する「からだ」という場をどういうメタファーで捉えるのかということが、人間の思考や行動にとっても大きな

影響を与え続けるのだと思う。だからこそ、普段から自分ができることは、病を「戦争のメタファー」ではなく「友愛・調和のメタファー」へと変換して捉えてみることだ。言葉は世界観をつくり、それが鑄型となり世界をつくりあげる。「からだ」を「戦いの場」と捉えるのか、「調和の場」と捉えるのか。そのことは未来の医療のあり方の問題でもあり、生き方や死に方や、社会のあり方にも関わってくると思う。だからこそ、「からだ」という場は、常にそれぞれの学びの場だと思ふ。

円環的 循環的

過去は記憶として立ち現れ、現在は直観として立ち現れ、未来は期待として立ち現れる。

神は常に現在である永遠という次元にたっている。

アウグスティヌス『告白録』より

人生 (Life) を捉えるときに、その時間的な流れを直線的な成長モデルで捉えるのか、円環的な成熟モデルで捉え

るのか、大きく異なる。

いのち (Life) を捉えるときに、自分が生きている人生だけの中に限定して捉えるのか、自分が生まれる前も死んだ後も含めた大きな輪の中で捉えるのかも、大きく異なる。生まれる前を指して前世という言葉があり、死んだ後を指して死後という言葉がある。これらの言葉は宗教性や思想性を帯びているだけに、言葉や概念自体に強い抵抗を持つ人も多い。魂はあるのかないのか、死後にも魂は存続するのかしないのか、死後の世界はあるのかないのか……などの議論は無限に生まれてくるが、自分は「あるかなしかな」という二元論的な議論を好まない。なぜなら、二元論の問いは、一方を善や真とし、他方を悪や嘘と安易に決めつける排他的な傾向をはらんでいるからだ。

大切なことは、言葉そのものにあるのではなく、自分の一生という狭い視点を超えた遙か先のいのちのつながりに思いを馳せることだと思う。

具体的には、ひとの「からだ」には、宇宙のあらゆる叡智が含まれていると、驚きや発見とともに日々感じている。「からだ」には数十億年、数百億年の情報が高度な形で圧縮保存されている。その圧縮された情報をうまく解凍して

取り出せないから、暗号が解読できない。「いのち」という宇宙的なプロジェクトは今まで一度も途切れたことがなく、過去も現在も、そして未来へとも延々と続いている。今という瞬間は、その遙かなるいのちのつながりの最先端でもある。今存在しているものすべてがいのちの流れの最先端にいるからこそ、このいのちの流れをどちらの方向に向かわせるのか、ということには大きな責任がある。

いのちのつながりの証拠はあらゆるところに潜んでいる。全員が平等に与えられて使わせてもらっている「からだ」という存在にも巧妙に隠されている。

からだは、精密で精妙で奇跡的な仕組みにより成立している。それは一朝一夕にできるものではなく、遙かな宇宙的な時間のつながりの中で少しずつ改変して変化して受け継がれてきたものだ。

からだは1秒1秒途切れることなく六〇兆個の細胞が調和的に働いている。生きている以上、その力はずっと途切れることなく、今もこうして連続的に働いている。六〇兆の多細胞である「からだ」は、地球や海という生命の培養装置を舞台として、遙か長い歴史をかけてつくられてきた芸術作品なのだ。

ひとの人生 (Life) を直線的な発展モデルで捉えていくと、死というのはそこで途切れたように感じてしまうものだが、円環的なモデルで捉えると、死は生とつながり存在の輪が完成する。人生を円環的に捉えていくことは、人生は長さではなく、質の問題であることを示唆しているともいえる。人生は瞬間瞬間で円環的に完結しているものだ。わたしたちが生や死をどのようなイメージで捉え、共有していくか、ということは未来の医療や生命観にとって重要なことだ。

六〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇の多細胞化

偶然というものは存在しない――

私たちが偶然と呼んでいるのは因果関係の複雑な仕組みに對する私たちの無知である――

ホルヘス「神曲」「七つの夜」より

るものはすべて例外なくこの調和的なシステムを前提として生きており、同時にいのちの力で生かされている。

人体は卵子と精子の出会いに始まる一つの受精卵という単細胞から、少しずつ分割されていくことで六〇兆個の細胞へと変化していく。その時に六〇兆の細胞はすべて正確に役割分担がなされていく。それぞれの細胞は各自の仕事を担当もって担う。心臓を構成する細胞は、心臓という役割をしっかりと果たすし、脳を構成する細胞は、脳という役割をしっかりと果たす。心臓の細胞が脳の細胞の働きをすることもないし、その逆もない。それぞれは役割に誇りを持ち分担当業を行う。専門分化しながらも、一つのからだという全体のために調和的な仕事をし続ける。からだに不調和な事態が起こると、病や症状の形で顕在化してくるが、それも調和的なプロセスの顕現にすぎない。

こういう驚異的な仕組みは、自分の八〇年だけの人生を考へても全く説明が付かないものであり、いのちそのものが、宇宙的な時間の流れの中ですべての歴史を受け継いで生きている。それは信念体系や信仰に依存しないものだ。

自分のからだやいのちに流れる歴史性を考へて思いを馳

この宇宙は約一四六億年前に生まれ、この地球は約四六億年前に生まれたとされる。水という神秘的な場を舞台に、海という巨大なゆりかごから約三五億年前に生命の原初的な形が生まれた。原始的な生命は単細胞生物という一つの細胞で完結していたが、その後約二五億年の長い歳月の試行錯誤をかけて、多細胞化への道を選ぶ一群の野心的な生命が現れた。そうして、今から約一〇億年前に多細胞生物がはじめて生まれたとされる。現生人類である新人 (ホモ・サピエンス) が登場したのは約二〇万年前のことなので、生命の歴史から見ると人間の歴史は浅く、新参者でもある。

この遙かないのちの歴史の中で、二つの細胞があわさって一つの生命となり、三つの細胞があわさって一つの生命となり……、という気が遠くなる試行錯誤を延々と繰り返し続け、人体は約六〇兆個の多細胞化という途方もない偉業を成し遂げた。

「からだ」はすべてのひとが生まれた時から無条件に与えられているので、この複雑な仕組みを当たり前のこととして感じてしまう。ひとのからだは「生きる」という自発的で調和的な営みは、生きている限り一瞬も途切れることはなく、生きていること自体がすでに神秘だ。生きとし生けるものではないだろうか。

宇宙がビッグバンという現象で初源に発生したと考えるのなら、すべての存在物はジグソーパズルのピースの一つ一つのようなものだ。ジグソーパズルのピースは、たった一つでも紛失してしまうと元の全体像へと復元することはできない。だからこそ、この宇宙に存在しているものにはすべて存在理由がある。すべては何らかのつながりや流れの中で派生して存在しているのだが、宇宙的ヴィジョンや宇宙地図が広大すぎて人間の脳ではうまく全体像を捉えることができないだけだ。つながりや流れのような時間性、歴史性を、頭の知識としてではなく、からだ全体の存在体験として深く強く感じる事が重要なことだ。

ひとの「からだ」を診ることは、そうした遙かなる宇宙的な流れで途切れることなく続いて生きたいのちの流れを感じながら診る (観る) ことであり、六〇兆の細胞が調和的に存在している背後の力を感じることもある。そうい

う調和的な力は、普段は当たり前すぎて感じる力が少ないが、病を含め体が不調和になった時に初めて、生命存在を裏打ちしている調和的な力を感じることができるといえるのは皮肉なことだ。

その調和的な力は発生源もメカニズムも、あまりに宇宙的で壮大すぎてよく分からないので、いくらでも神秘的な解釈もできるし、いくらでも合理化できる。ただ、大切なことは、いのちの調和的な流れを強く深く感じながら生きるということだ。いのちの流れに自分自身も積極的に参加して関わって生きていくということだ。そのことを気付くために、仏教でいう四苦という生老病死があるのだと思う。四苦はそこにとらわれて呪縛されるものではなく、いのちの流れに気付くためのきっかけである。

歴史的な存在として

個体としての行動は、他から隔絶されている（個体）が行動するのではない。（大宇宙）の無限の条件づけの一つの（結び目）が行動しているのである。

度を越した自然破壊や文化の破壊も同じことだ。人間は、「いのち」という宇宙的な共同プロジェクトに参加している。自分も生まれながらにそのプロジェクトの構成員であるという自覚さえあれば、少なくとも三〇四世代先（一〇〇〇〜二〇〇〇年後）くらいの視点では物事を考えるはずだ。自分だけの数十年の人生でいのちを考えるから、短期的なヴィジョンに基づいた計画になる。いのちは過去へも未来へもつながっていて、個人は、いのちという巨大な人体の一つの細胞を構成している存在だ。

輪廻や生まれ変わりということが仏教や民俗学でいわれるが、その本質は、過去や未来と現在とがしっかり関係性を持ってつながっているか、ということにあるのだと思う。

植物性臓器と自然・宇宙

時間的にも空間的にも、この机は「非机（机ではない）的要素」からのみなりたっています。——机が存在しているということとは、すべての「非机的要素」が存在しているという

こういう視点にまで到達すると、自分が真理をさとるのだと考えることはできない。全宇宙が自分をして真理をさとらせてくれるのである。

中村元「自己の探求」より

すべてのものに流れがあり、歴史性や時間性が存在している。万物に時が流れ、時が貫通している。

人類が苦悩するこの世の善や悪の問題は、人類の視点の中に時間性や歴史性が含まれているかという問題でもあると思う。過去や未来としっかりつながっているか、という問題に還元される。

なぜならば、過去を思い返して過去の行為が悪かったと後悔するということは、未来の自分があとでそれをどう見るか、という長期的なヴィジョンに欠けていたということだから。自分という存在は、時間存在の中で幅を持って存在している。自分という存在は、今だけではなく、過去にも未来にも続いており、その連続性の幅の中で自分は存在している。

そのことを思い出せば、必然的に悪いことはできなくなるし、自分自身に対して包括的な視点で接することができる。

こと、言い換えれば全宇宙が存在していることを示しているのです。こういう考えは、華嚴思想の体系のなかでは、「重々無尽の縁起」という言葉によって表現されています。

「——（一即多、多即一）」ということですが。私はそれを「相互依存的存在（inter-being）」という言葉で呼んでいます。

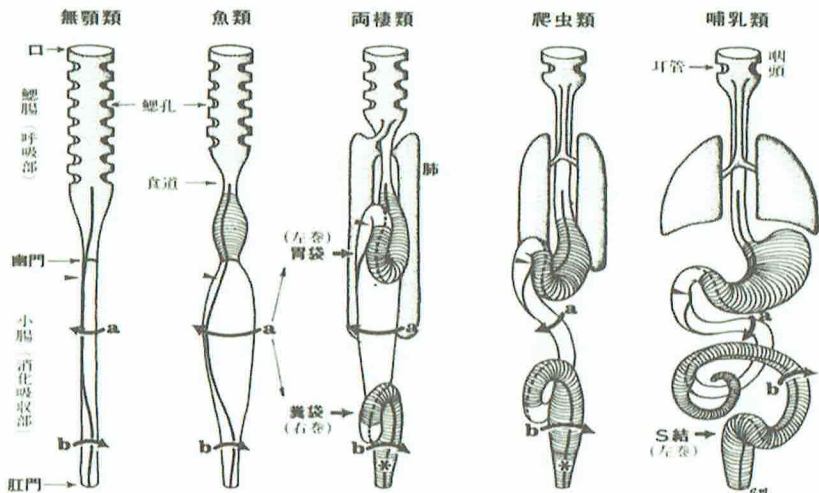
ティク・ナット・ハン「禪への鍵」より

では、なぜ宇宙や自然と深くつながりを持ちにくくなったのだろうか。

そのことは、わたしたちの「からだ」の構造と関連している。

ひとのからだは、発生学的に植物性臓器と動物性臓器に分かれる。植物性臓器は内臓などに代表されるもので、（性や食）を担当し、いのちの根源を担う。それに対して、動物性臓器は（感覚―神経―運動）を担い、植物性臓器を補助するためのものである。

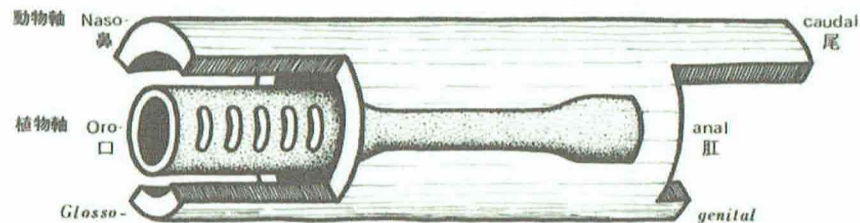
ひとのからだは、植物性臓器が内側にあり、動物性臓器が外側から覆うような構造をしている。植物が大自然と共鳴して存在しているのと同じように、植物性臓器は常に自然や宇宙と調和し共振しているが、動物性臓器（動物は（動



【図2】植物性臓器（腸管）の歴史

生命が海から陸へと移動する過程の中でさまざまな変更が行われた。

三木成夫『生命の形態学—地層・記憶・リズム』（うぶすな書院、2013）



【図1】人体は二重の「くだ」構造が螺旋にねじれたもの。ひとのからだは、動物性臓器が外側に、植物性臓器（内臓など）が内側にある二重の円筒構造をしている。自然や宇宙と共振する植物性臓器はマイクロコスモスとして人体の中に閉じ込められ、反自然の性質を持つ動物性臓器が表面に出ている。

三木成夫『生命の形態学—地層・記憶・リズム』（うぶすな書院、2013）

くもの）であり、そもそも反自然の性質を持つ）が表面を覆い、人間は動物性臓器である神経系としての脳が大きな比重を占めるようになったため、宇宙や自然と共鳴・共振・交信している植物性臓器の存在を感じにくくなってしまった。女性の月経は、植物性臓器が月の周期と共振・交信していることを毎月知らせている。

私たちの内なる植物性臓器は、意識せずとも常にいのちの根源を担って働いてくれている。その働きに気付くだけでも自然や宇宙との共鳴を感じる事ができる。それは感謝してし過ぎることはない。

多細胞生物は、複数の細胞が寄り集まり、少しずつ腸管という管のような存在となり、そこからさまざまな専門分化して複雑化して、ひとのからだができあがった。

ひとのからだの原始的な形は、外に出て自然を観察すればあらゆる場所に存在していて、そうした多元的な時間が存在していることを思い出すことができる。

無顎類むかくるいという腸管の管だけのような生命体が、海から陸へと上陸し、腸管の一部を膨らませて肺をつくりあげ、複

雑化した消化器系はらせんにねじってからだの中に収まるようにデザインされ、鰓えんの穴は、先頭の一つの穴を耳の穴として名残を残すだけに、他の穴はすべて閉鎖した首を形づくった。こういう長い時を経て、ひとのからだというデザインはつくりあげられていった。

調和

君子は和すれども同せず。小人は同すれども和せず

（君子和而不同、小人同而不和）

孔子「論語」「子路第十三」より

ひとのからだにある多様な細胞や臓器は、さまざまな臓器へと専門分化して独自の役割を担っているが、それぞれが孤立化するために専門分化したわけではない。専門分化は調和的に協力することを目的として行われたものだ。

医療も含めた社会のさまざまな職種でも同じことがいえる。

